

9月22日（月）「平和の尊さを考える 平和学習」

各学年で、平和学習を行いました。平和に関する動画や写真、絵本・図書等を使って学習しました。平和への思いを、これからも継承していきたいです。

「ひいおじいちゃんやひいおばあちゃんから、戦争の話を聞きました。」という子どもたちも、たくさんいました。戦争の痛みや悲しみ、そして、平和への思いを家庭でも引き継いでくださっていることに、胸が熱くなりました。自分自身を大切にする、周りの人も大切にする、そのことを改めて考えました。

～子どもたちの思いや考え等～

- ・ぜったいに、せんそうをしたくありません。へいわになってほしいとおもいます。
- ・げんばくのことを学習して、かくへいきが、なくなってほしいとおもった。
- ・いっぱい食べたり遊べたり、家族とすごせたり、これからもそんな生活が続いてほしい。
- ・原爆はみんなの暮らしや家族、友達といった大切なものや人を奪うものだと思います。なぜ、戦争をするのかと思いました。
- ・平和を訴える文章をいろいろな言語で書いて、戦争は、絶対にしてはいけないことを伝えていきたい。
- ・広島と長崎の2つの土地で落とされた原爆で、たくさんの人数の人が亡くなり、今でも傷や放射能に苦しんでおられる方がおられる。80年間も苦しんでいるのだと分かった。
- ・戦争は、人の心でできるわけだから、心の中の平和の砦をつくらなければいけない。
- ・修学旅行で、実際に広島に行くときは、平和学習で学んだことや自分が考えたことを忘れずに、実際に広島に行って実物を見て、戦争の悲惨さや平和の尊さ、大切さを学びたい。
- ・なぜ、こんなにもたくさんの人が悲しんで、人がいっぱい亡くなっているのに、他の国の人たちは戦争を続けているのかなと思った。どこの国でも、戦争が、起きないようにどうすればよいのかを考えていきたい。
- ・原爆の話を聞いて、もう二度と戦争をせずに、平和に生活することが大切だと思った。
- ・いつもの日常が、壊されていく恐ろしさや悲しさ、悲惨さを考えて、修学旅行でいろいろと学びたいと思います。



「おばあちゃんの歌」沖縄戦没者追悼式で朗読の平和の詩

毎年、ぼくと弟は慰霊の日に
おばあちゃんの家に行って
仏壇に手を合わせウートーをする

一年に一度だけ
おばあちゃんが歌う
「空しゅう警報聞こえてきたら
今はぼくたち小さいから
大人の言うことよく聞いて
あわてないで さわがないで 落ち着いて
入って いましよう防空壕」
五歳の時に習ったのに
八十年後の今でも覚えている
笑顔で歌っているから
楽しい歌だと思っていた
ぼくは五歳の時に習った歌なんて覚えていない
ビデオの中のぼくはあんなに楽しそうに踊りながら歌っているのに

一年に一度だけ
おばあちゃんが歌う
「うんじゅん わんにん 艦砲ぬ くえーぬくさー」
泣きながら歌っているから悲しい歌だと分かっていた
歌った後に
「あの戦の時に死んでおけば良かった」
と言うからぼくも泣きたくなった
沖縄戦の激しい艦砲射撃でケガをして生き残った人のことを
「艦砲射撃の食べ残し」
と言うことを知って悲しくなった
おばあちゃんの家族は
戦争が終わっていることも知らず
防空壕に隠れていた
戦車に乗ったアメリカ兵に「デテコイ」と言われたが
戦車でひき殺されると思い出で行かなかった
手榴弾を壕の中に投げられ
おばあちゃんは左の太ももに大けがをした

うじがわいて何度も皮がはがれるから
アメリカ軍の病院で
けがをしていない右の太ももの皮をはいで
皮ふ移植をして何とか助かった
でも、大きな傷あとが残った
傷のことを誰にも言えず
先生に叱られても
傷が見える体育着に着替えることが出来ず
学生時代は苦しんでいた

五歳のおばあちゃんが防空壕での歌を歌い
「艦砲射撃の食べ残し」と言われても
生きてくれて本当に良かったと思った
おばあちゃんに
生きていてくれて本当にありがとうと伝えたと
両手でぼくのほっぺをさわって
「生き延びたくとう ぬちぬ ちるがたん」
生き延びたから 命がつながったんだね
とおばあちゃんが言った

八十年前の戦争で
おばあちゃんは心と体に大きな傷を負った
その傷は何十年経っても消えない
人の命を奪い苦しめる戦争を二度と起こさないように
おばあちゃんから聞いた戦争の話を伝え続けていく
おばあちゃんが繋いでくれた命を大切に
一生懸命に生きていく

広島 平和への誓い

いつかはおとずれる、被爆者のいない世界。

同じ過ちを繰り返さないために、多くの人が事実を知る必要があります。

原子爆弾が投下されたあの日のことを、思い浮かべたことはありますか。

昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。

この広島に人類初の原子爆弾が投下され、一瞬にして当たり前の日常が消えました。

誰なのか分からないくらい皮膚がただれた人々。

涙とともに止まらない、絶望の声。

一発の原子爆弾は、多くの命を奪い、人々の人生を変えたのです。

被爆から80年が経つ今、

本当は辛くて、思い出したくない記憶を伝えてくださる被爆者の方々から、直接話を聞く機会は少なくなっています。

どんなに時が流れても、あの悲劇を風化させず、

記録として被爆者の声を次の世代へ語り継いでいく使命が、私たちにはあります。

世界では、今もどこかで戦争が起きています。

大切な人を失い、生きることに絶望している人々がたくさんいます。

その事実を自分のこととして考え、平和について関心をもつこと。

多様性を認め、相手のことを理解しようとする事。

一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うことができれば、傷つき、悲しい思いをする人がいなくなるはずで。

周りの人たちのために、ほんの少し行動することが、

いずれ世界の平和につながるのではないのでしょうか。

One voice.

たとえ一つの声でも、学んだ事実思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずで。

大人だけでなく、こどもである私たちも平和のために行動することができます。

あの日の出来事を、ヒロシマの歴史を、二度と繰り返さないために、

私たちが、被爆者の方々の思いを語り継ぎ、一人一人の声を紡ぎながら、平和を創り上げていきます。